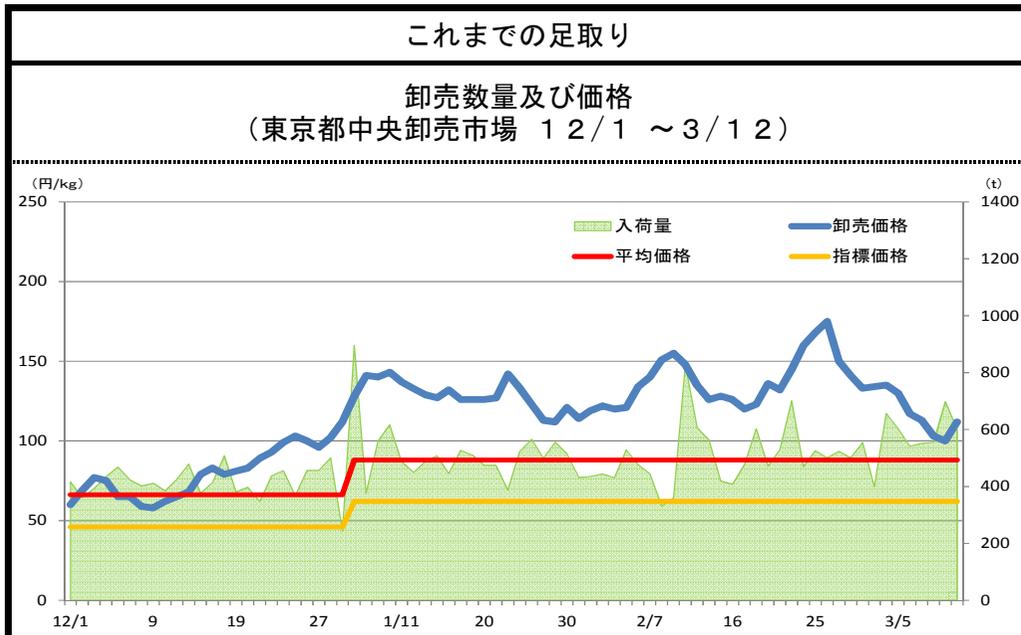


# ○24年産春野菜の需給・価格の見通しについて（概要）

資料2-2

## 春キャベツ（4～6月）



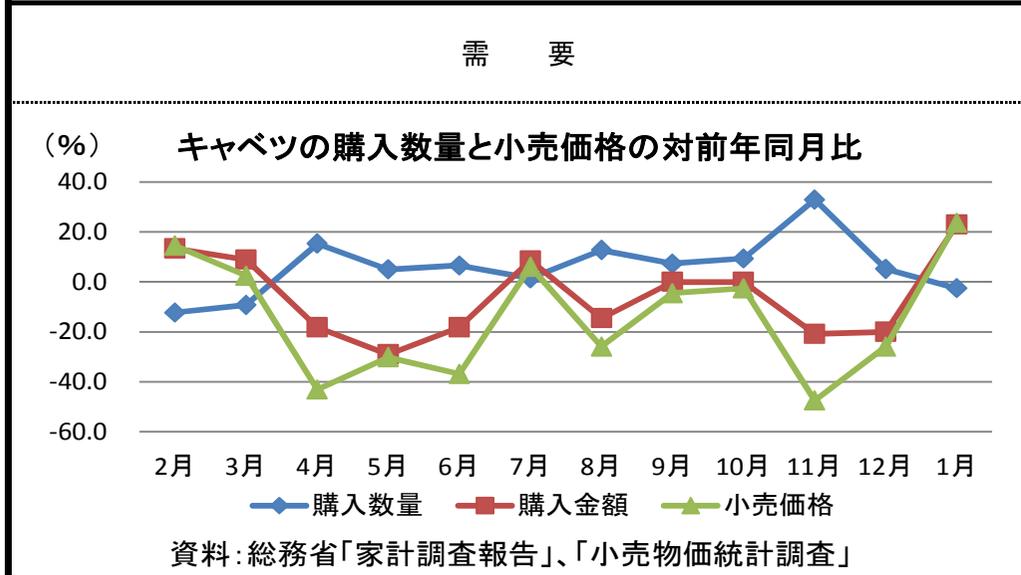
今後の見通し

供給  
(生産・出荷の現況及び今後の天候見通し)

(主な産地：千葉、神奈川、愛知)

1 作付面積は、千葉は前年比101%。神奈川は同96%。愛知は同90%。  
生育状況は、千葉は1月下旬以降の多雨・降雪・日照不足による定植作業の遅れ、低温による生育遅れが見られる。神奈川は12月以降の低温、干ばつにより生育が遅れている。愛知は年明けの低温干ばつにより冬・春系は小玉傾向。夏系はは種、定植ともに遅れが見られる。出荷開始は、千葉は4月上旬、神奈川は3月下旬、愛知は3月下旬。

2 この先1ヶ月の気象予報は、気温は平年並み、日照時間は平年並み、降水量は平年より少なめの見込み。



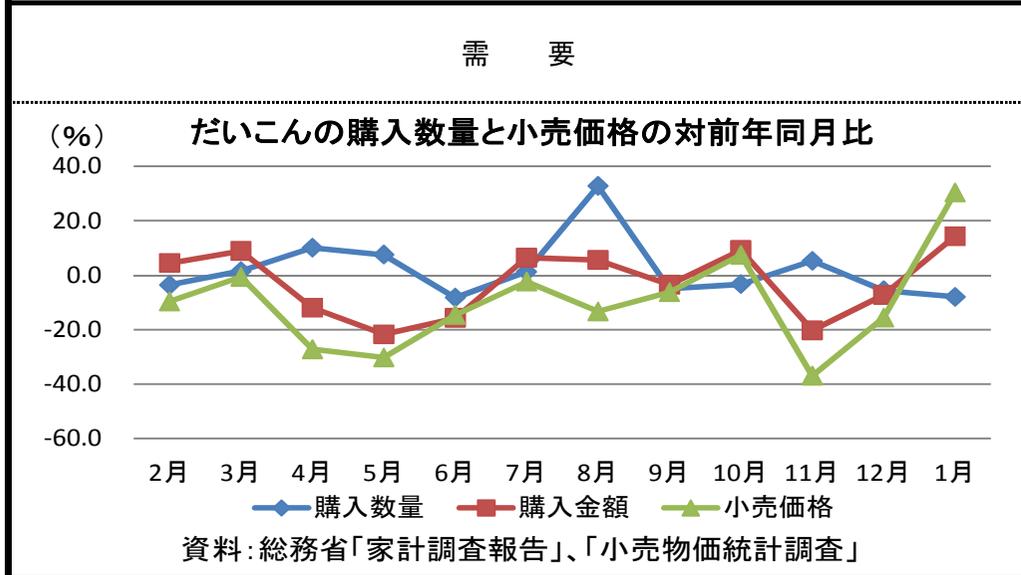
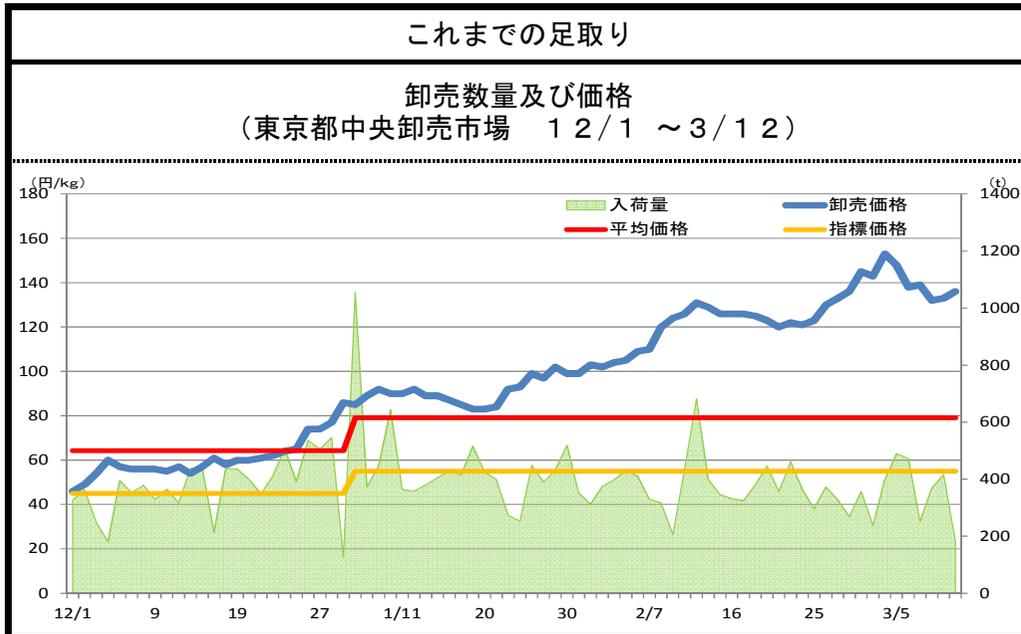
野菜需給・価格情報委員会  
での需給・価格の見通し

1 供給見通し  
作付面積は、千葉は前年並みと見込まれるが、神奈川及び愛知は前年を下回り、全体としては前年をやや下回る見込み。  
生育状況は、多雨、降雪及び日照不足による定植作業の遅れと低温及び干ばつによる生育遅れが見られ、小玉傾向。  
出荷量は、4月は前年並みで、5月は前年を上回るが、6月以降は前年をやや下回り、全体としては前年並みで、平年を上回る見込み。

2 需要・価格見通し  
4月は前年並みの出荷が見込まれるものの、価格は震災等の影響で安値であった前年を上回ると見込まれるが、5月以降、価格は前年及び平年を下回る見込み。  
加工・業務用では、寒玉系の出荷が早めに終了すれば、中国産、韓国産の使用にシフトする可能性。

# ○24年産春野菜の需給・価格の見通しについて（概要）

## 春だいこん（4～6月）



今後の見通し

供 給  
(生産・出荷の現況及び今後の天候見通し)

(主な産地：千葉、長崎)

1 作付面積は、千葉は前年比101%。長崎は同102%。  
生育状況は、千葉は12月中旬以降の低温及び1月下旬以降の日照不足により生育遅れ。長崎は年明け以降の低温・干ばつにより、若干の遅れが見られる。  
出荷開始は、千葉は4月上旬、長崎は3月上旬。

2 この先1ヶ月の気象予報は、気温は平年並み、日照時間は平年並み、降水量は平年より少なめの見込み。

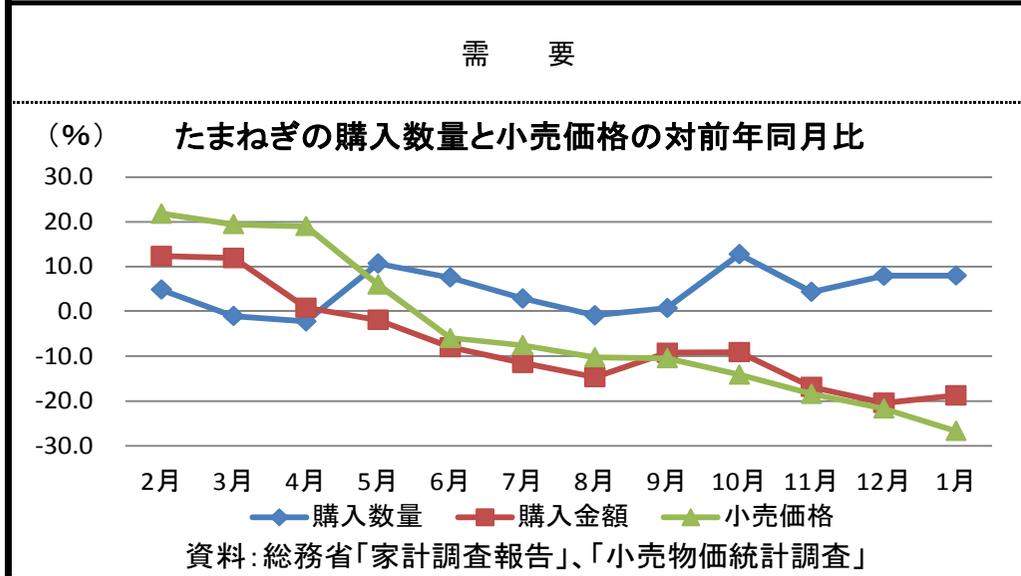
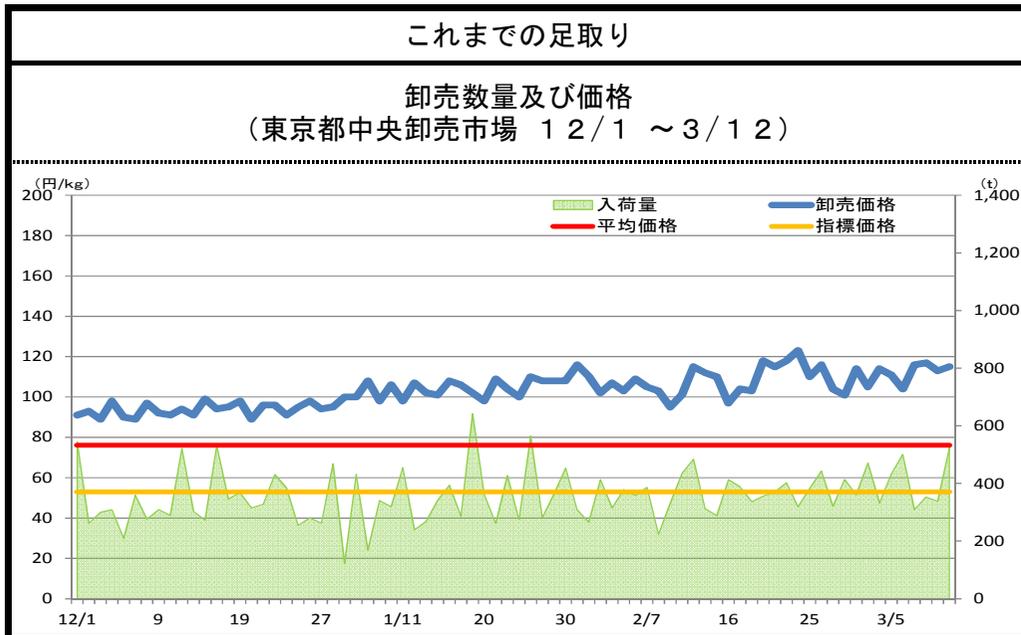
野菜需給・価格情報委員会  
での需給・価格の見通し

1 供給見通し  
作付面積は、千葉、長崎ともに前年並みの見込み。  
生育状況は、低温、干ばつ等の影響により若干の遅れが見られる。  
出荷量は、4月から5月にかけては多かった前年をやや下回るものの、平年を上回り、6月は前年を上回るが平年を下回る見込み。全体としては多かった前年を下回るものの、平年をやや上回る見込み。

2 需要・価格見通し  
価格は、4月以降平年並みと見込まれるが、6月は青森産への切替りの状況次第で価格が前年を上回る可能性もある。  
外食用では、価格が高いことから、切りだいこんを使用するケースも見られる。一方、加工・業務用では、中国産のだいこんを使用したところ、使えるとの評価がなされている。

# ○24年産春野菜の需給・価格の見通しについて（概要）

## たまねぎ（4～6月）



今後の見通し

供 給  
(生産・出荷の現況及び今後の天候見通し)

(主な産地：北海道、佐賀、兵庫)

1 作付面積は、北海道は前年比104%、佐賀は同98%、兵庫は同102%。  
生育状況は、北海道はは種及び苗立ての作業の準備段階。佐賀は年末から年明けにかけての低温・乾燥により、中晩生については微減になる見込み。  
兵庫は定植作業は順調に進んだが、冬期の低温で昨年より若干草丈が低い傾向。  
出荷開始は、佐賀は3月下旬、兵庫は5月上旬。北海道は引き続き23年産の貯蔵ものが出荷。

2 この先1ヶ月の気象予報は、気温は平年並み、日照時間は平年並み、降水量は平年より少なめの見込み。

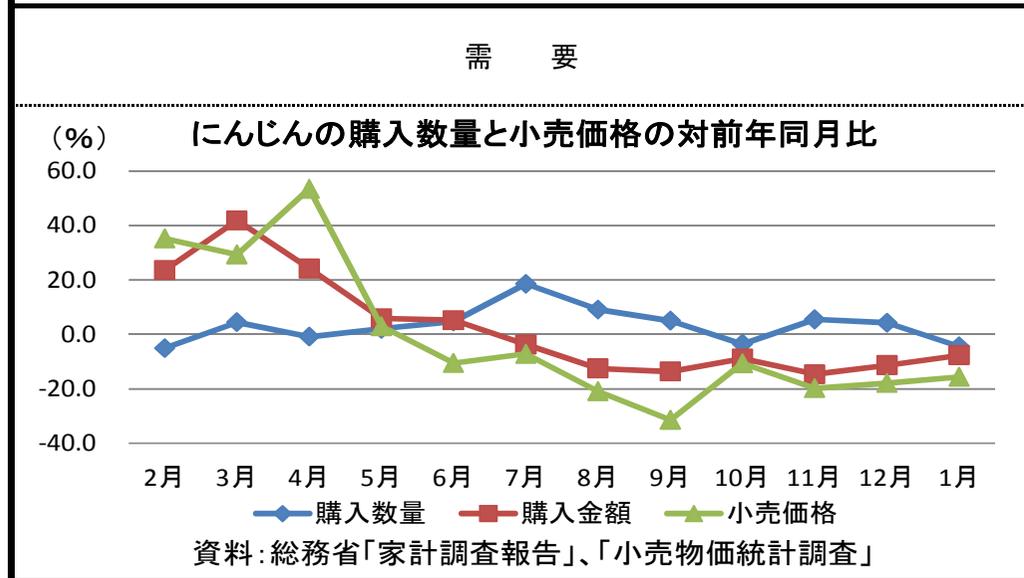
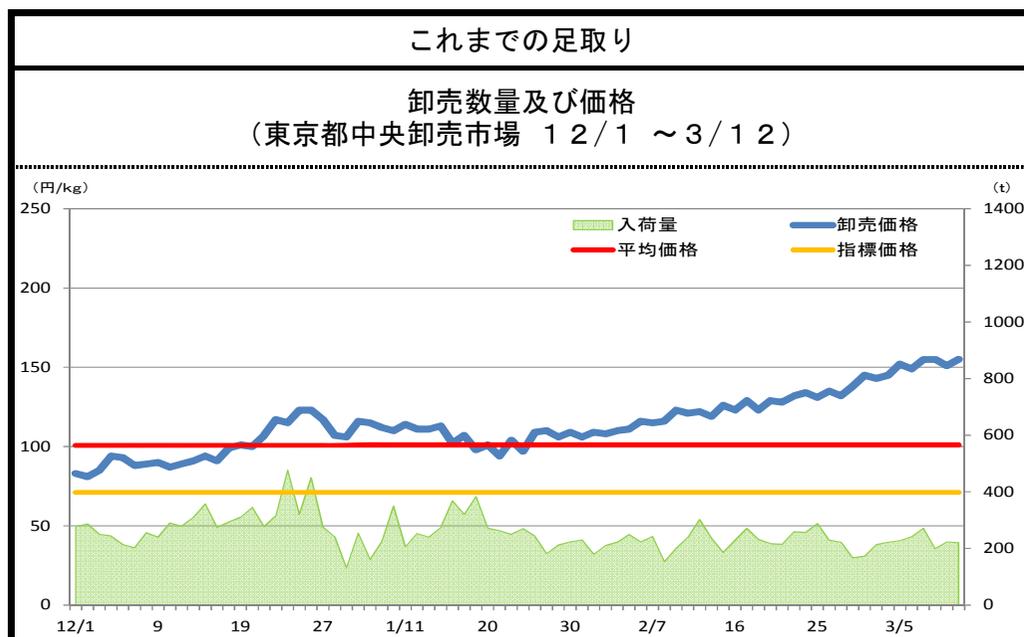
野菜需給・価格情報委員会  
での需給・価格の見通し

1 供給見通し  
作付面積は、北海道及び兵庫は前年を上回るが、佐賀が前年を下回り、全体として前年並みとなる見込み。  
生育状況は、年末から年明けにかけて低温及び乾燥により、佐賀の中晩生に影響が若干出ている。  
出荷量は、5月に前年をやや下回るものの、全体としては前年、平年ともに上回る見込み。

2 需要・価格見通し  
5月上旬頃に出荷が重なる可能性があり、価格は前年を下回る可能性があるが、全体としては前年並みの見込み。  
国内産の加工・業務用への対応次第では、中国産の輸入が増加する可能性がある。

# ○24年産春野菜の需給・価格の見通しについて（概要）

## 春夏にんじん（4～7月）



今後の見通し

供 給  
(生産・出荷の現況及び今後の天候見通し)

(主な産地：徳島、千葉)

1 作付面積は、徳島は103%、千葉は同99%。  
生育状況は、徳島は年明け以降の低温・干ばつにより、やや遅れ気味で推移。千葉は年内播きは順調だったが、年明け以降は低温、乾燥、降雪等によりは種作業が遅れている。12月中旬以降の寒波により生育も遅れている。  
出荷開始は、徳島は3月上旬、千葉は4月下旬。

2 この先1ヶ月の気象予報は、気温は平年並み、日照時間は平年並み、降水量は平年より少なめの見込み。

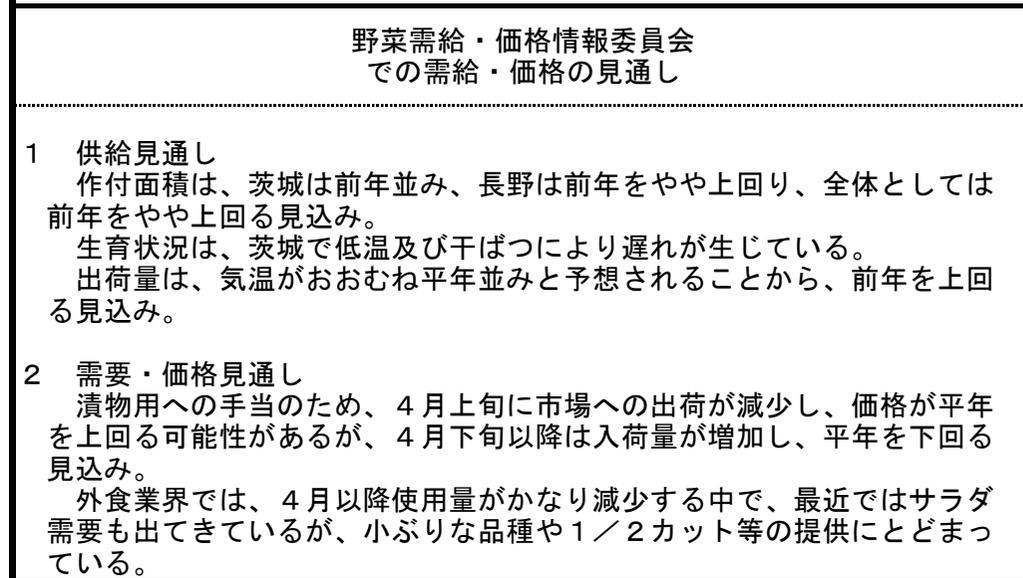
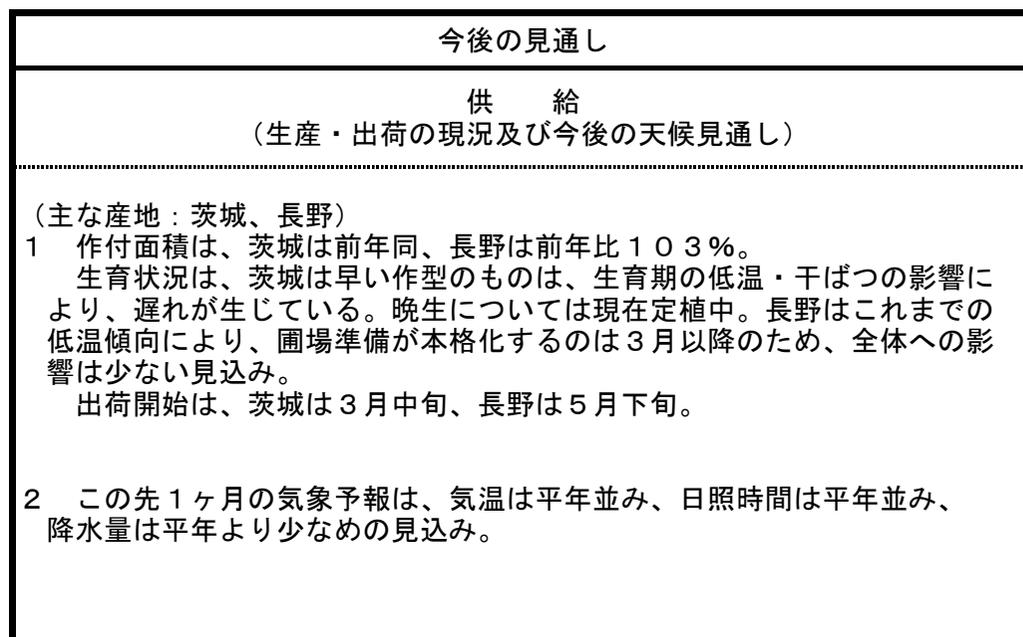
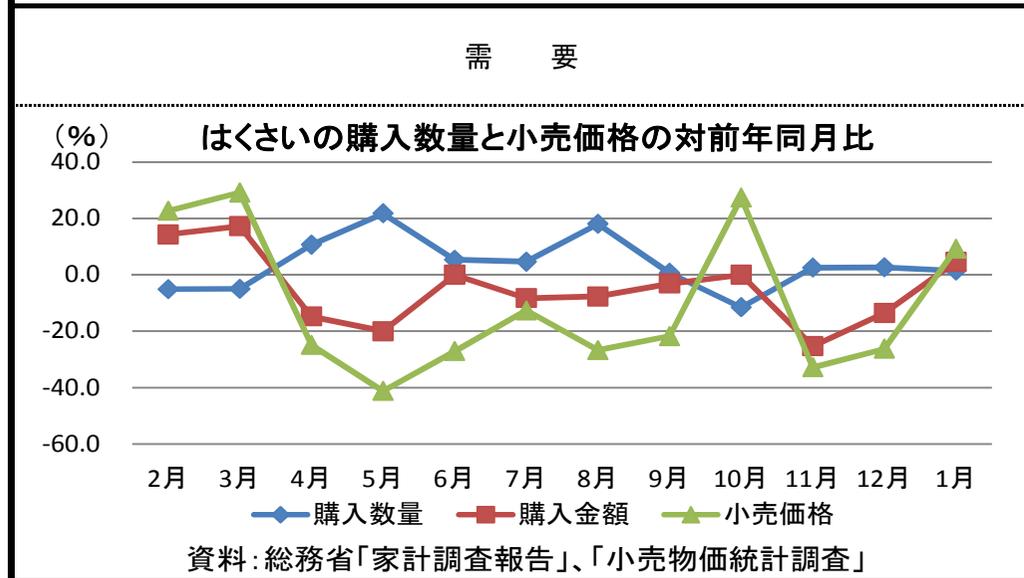
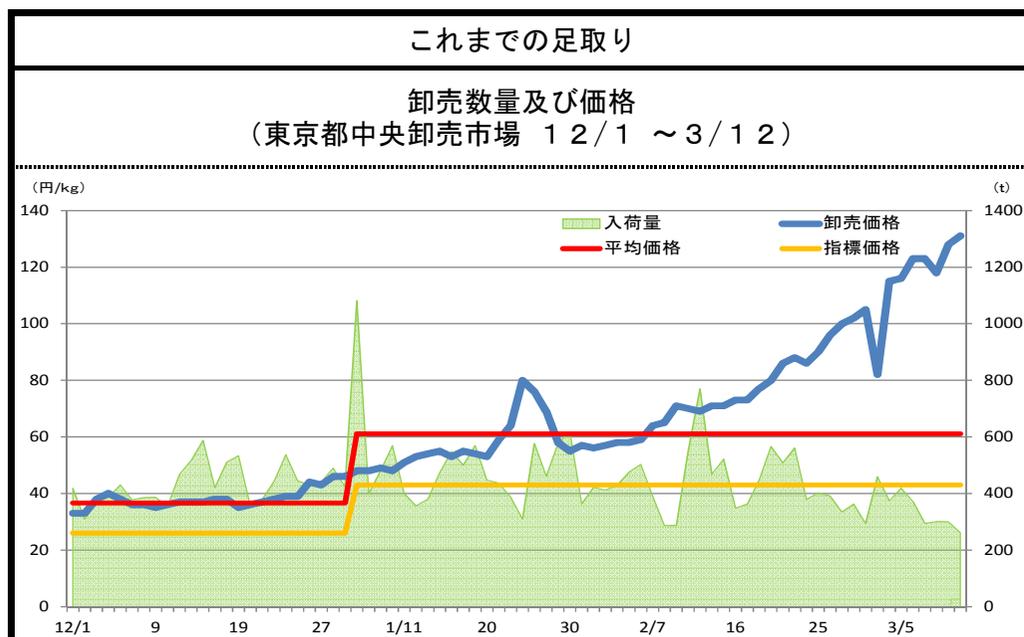
野菜需給・価格情報委員会  
での需給・価格の見通し

1 供給見通し  
作付面積は、千葉ですいかからの品目転換が進んでいるものの、全体としては前年並みの見込み。  
生育状況は、低温、干ばつ及び降雪により、は種作業が遅れているうえに、寒波により生育も遅れ気味。  
出荷量は、多かった前年並みで、平年をやや上回る見込み。

2 需要・価格見通し  
順調な出荷が見込まれることから、価格は平年並みと見込まれるが、5月下旬には平年を下回る可能性。  
主産地との価格差から、九州産への手当てが増える傾向にある。  
加工・業務用は、国産への回帰の動きもあるが、一方で価格面の有利性から、中国産等の輸入ものへの移行も見られる。

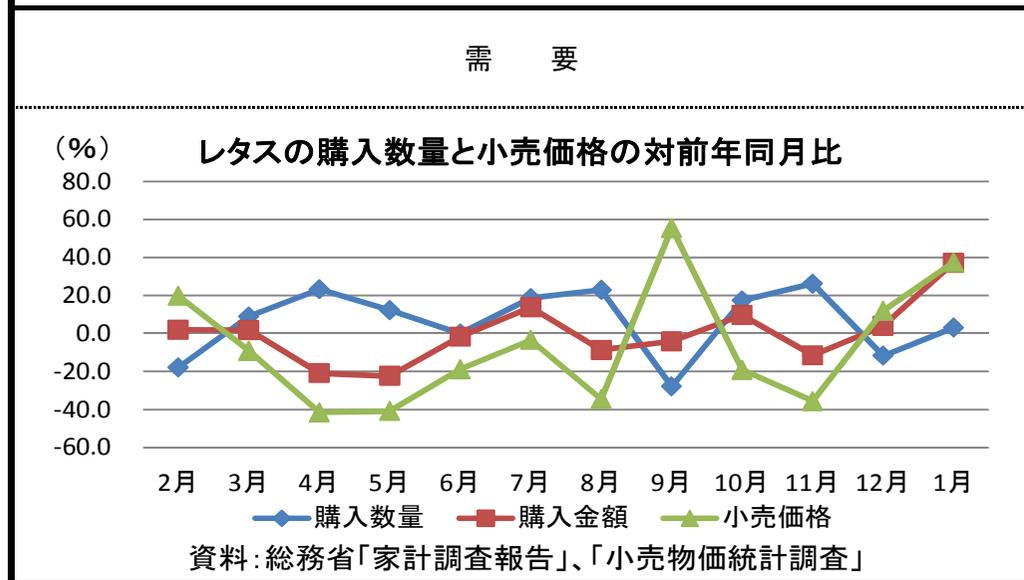
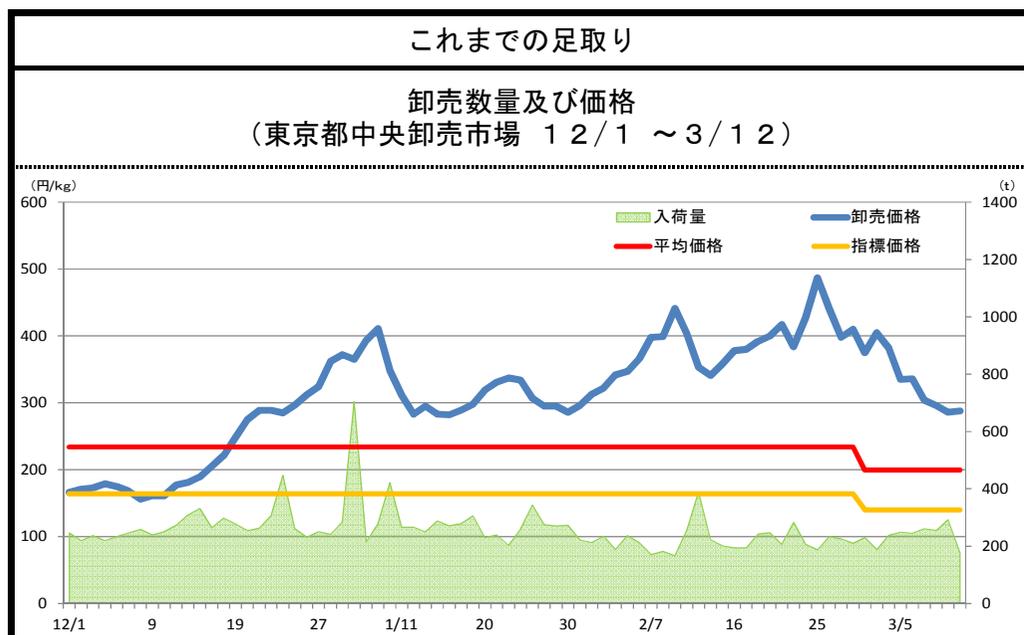
# ○24年産春野菜の需給・価格の見通しについて（概要）

## 春はくさい（4～6月）



# ○24年産春野菜の需給・価格の見通しについて（概要）

## 春レタス（4～5月）



今後の見通し

供 給  
(生産・出荷の現況及び今後の天候見通し)

(主な産地：茨城、長野、兵庫)

1 作付面積は、茨城及び兵庫は前年同、長野は前年比101%。  
生育状況は、茨城は1から2月にかけての干ばつ・低温により生育が遅れている。長野は降雪、低温の日が続き、全般に作業は遅れている状況。兵庫は低温・干ばつの影響から生育は遅れ気味であるが、最近の降雨で干ばつは解消の見込み。  
出荷開始は、茨城は2月中旬、長野は4月中旬、兵庫は4月上旬。

2 この先1ヶ月の気象予報は、気温は平年並み、日照時間は平年並み、降水量は平年より少なめの見込み。

野菜需給・価格情報委員会  
での需給・価格の見通し

1 供給見通し  
作付面積は、茨城、長野、兵庫ともにほぼ前年並みの見込み。  
生育状況は、降雪及び低温により遅れが見られるが、今後の気温次第で回復の可能性あり。  
出荷量は、4月以降は前年及び平年を上回る見込み。

2 需要・価格見通し  
生育が遅れていた分の出荷が4月中・下旬以降に集中し、価格は前年を下回る見込み。  
価格高騰の影響を受け、加工・業務用では、台湾産への需要が高まる傾向にある。

## その他春野菜全体の消費の動向など

### 【景気、天候などの要因による消費動向】

- ・11月及び12月前半の気温が高かったことによる前進出荷に加えて、その後の寒波等の影響により市場への入荷量が減少し、価格が高値となった。小売においては、単価が上がったため金額ベースでは好調であったが、数量ベースでは減少した。
- ・野菜の高値を背景に、価格が一定で、食べ残し等の無駄の少ないカット野菜が伸びている。

### 【震災、原発事故の影響による消費動向】

- ・冬場の産地は、関東より西が中心であることから、一般の小売においては影響はほとんどなかった。
- ・加工・業務用では、一部地域を除いてほとんど抵抗がなくなってきているが、学校給食用においては依然として特定地域への抵抗感が存在している。
- ・4月から、放射性物質の規制値が引き下げられることに伴い、検査の費用について、誰が負担するかが課題。

### 【野菜全体の販売状況】

- ・カット野菜の消費は、簡便性を求める消費者のニーズにも合致し、家計消費においては従来以上に大幅に増加している。今後、価格動向との関係をより注視する必要。
- ・通常1/4カットしているものをさらに1/6、1/8カットにしたり、鍋物用にざく切りにしたりして、商品を小口化している。

### 【春野菜の消費動向等】

- ・冬場は、西南暖地を中心とした西の産地の野菜が多かったが、春から夏にかけては関東以北の産地が主流となり、原発事故の影響を心配する消費者の反応が心配。消費者ストレスの緩和のため、西の産地との併売を行う動きがある。
- ・昨年は東日本大震災後の自粛ムードから、花見需要やレジャーを見込んだ販売戦略を打つことができなかった。今年は弁当、惣菜等を含めて春の食材を積極的に販売する動きがある。

### 【その他】

- ・加工・業務用需要が伸びている中で、加工用産地の育成が今後の大きな課題。
- ・野菜の価格が高騰し、小売の段階ではカット野菜の販売量が増えた一方で、外食業界では、コスト削減のためにカット作業を内製化する傾向も見られる。
- ・消費拡大を行うためには「簡便性」と「機能性」がキーワードになる。その場合、野菜の機能性については、一時的な情報に惑わされないように「医食農連携」を確立し、医学的エビデンスをしっかりと構築することが必要。
- ・若年層においては、特に調理をしない傾向があり鍋物用具材がセットになった「野菜キット」が伸びる傾向にある。
- ・今後は60代～70代の「高齢・単身世帯」をターゲットにした販売戦略が必要。コンビニだけでなく、遠方のスーパーにも足を運んでもらうため、小量目化をさらに進めていくことが必要。
- ・食育は子供だけではなく、大学入学時や社会人になる時期等生活スタイルの変化があるタイミングで行うことが効果的ではないか。